

成長する B R I C s (ブリックス) 諸国

Q 1 . 最近、B R I C s の成長に注目が集まっているということですが、B R I C s とは何のことですか？

- ・ B R I C s とは、ブラジル、ロシア、インド、中国 (C h i n a) の 4 ケ国を指す言葉で、それぞれの国の頭文字を並べて総称したものです。2003 年の秋にある外国の証券会社が、B R I C s 4 ケ国は高い成長を続けて、その経済規模 (G D P : 国内総生産) は 2025 年までには米国、日本、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアという先進 6 ケ国 (以下 G 6) 合計の 2 分の 1 を超えて、2040 年までには G 6 の経済規模を上回るというレポートを出してから、B R I C s という言葉がよく使われるようになりました。
- ・ B R I C s 4 ケ国の人口をあわせて 27 億人で全世界の人口の 4 割以上を占めています。国民一人当たりで見た G D P の水準は先進国に比べるとまだはるかに低いものの、G D P の規模はすでにイギリス、ドイツ、フランス、イタリアを上回っており、米国の 3 割程度、日本の 7 割程度の水準に達しています。ちなみに、2004 年の B R I C s 4 ケ国の実質成長率は平均すると 7.9% であり、G 6 の平均 3.3% を大きく上回っています。

図表 1 . G D P 成長率

	B R I C s					G 6							世界
	ブラジル	ロシア	インド	中国	BRICs計	米国	日本	英国	ドイツ	フランス	イタリア	G 6 計	
人口(百万人)	177	143	1064	1288	2673	291	127	59	83	60	58	677	6272
GDP(億ドル)	4,923	4,335	5,990	14,099	29,346	108,816	43,264	17,949	24,007	17,480	14,659	226,174	363,562
1人あたりGDP(ドル)	2,788	3,022	563	1,094	1,098	37,388	34,010	30,278	29,081	29,267	25,429	33,386	5,797
2004年成長率(%)	5.2	7.1	6.9	9.5	7.9	4.4	2.7	3.1	1.0	2.3	1.2	3.3	5.0

(注1)人口、GDPは2003年の数値でWorld Bank"World Development Indicators"に基づく

(注2)2004年成長率は各国統計による。ただし、インドは2004年度(4～3月)の政府見込み値。世界の成長率はIMFによる見込み値(2004年9月時点)

(出所)World Bank"World Development Indicators"、各国資料

Q 2 . B R I C s が高い成長を遂げているのはなぜですか？

- ・ B R I C s といっても 4 ケ国の経済構造は同じではありません。まず、ブラジルは農畜産物と鉱物資源に恵まれています。たとえば大豆の生産は世界第 2 位、鶏肉は世界第 3 位です。鉱物資源では鉄鉱石の生産が世界第 2 位です。世界需要の拡大に加えて、穀物や鉱物資源の価格が上昇していることも追い風となって、ブラジルからの輸出が増加しています。また、製造業では、自動車の生産と輸出が拡大しています。
- ・ ロシアもブラジルと同様に資源大国です。特に、原油の生産量は世界第 1 位 (埋蔵量

は世界第7位)であり、天然ガスの生産量も世界第2位(埋蔵量は世界第1位)と、エネルギー資源に恵まれています。ロシアは、旧ソ連の崩壊による市場経済への移行や通貨危機による混乱などによって、長らくマイナス成長が続いていましたが、1999年以降は原油輸出の拡大に支えられてプラス成長が続いています。原油価格の上昇はロシア経済にとって一段の追い風となっています。

- ・ インドの産業構造は農業の占めるウェイトが高く、農業生産の動向が経済成長に影響します。中国のように製造業の生産力が急速に拡大しているわけではありませんが、ソフトウェアの分野では優秀な人材に恵まれており、有力な輸出産業となっています。また、インドは中国について世界第2位の人口大国です。中国の人口が今後伸び悩んでくることが予想されるのに対して、インドの人口は高い伸びを続ける見込みで、インド市場の将来性に期待する人も増えています。
- ・ 中国は、B R I C sの中では貿易取引や直接投資などを通してもっとも日本との関係が深い国です。中国は、世界第1位の人口大国であり、その豊富な労働力を求めて外国の資本も流入し、次々と工場が建設されています。世界の生産基地としての発展が中国の成長の原動力です。そして、経済発展にともない中国の人々の所得水準が高まるにつれて、自動車など耐久消費財に対する需要が拡大し、個人消費が伸びています。

Q3. B R I C s が成長すると世界経済や日本経済にどのような影響がありますか？

- ・ B R I C s 経済の成長とともにこれら4ヶ国への輸出が拡大します。まず、所得水準が向上するにつれて耐久財の普及率が高まるので、自動車など耐久消費財の輸出が拡大します。また、生産拠点として発展するにつれて工場の新設に必要な機械など資本財の輸出が拡大し、工場が稼動を始めるとそこで使われる部品の輸出が拡大します。
- ・ B R I C s の中でも特に中国の工業生産力が拡大しています。中国から世界に安価な製品が大量に輸出されると、日本をはじめ世界の他の生産国の競争力が失われてしまいます。競争力を維持するために生産拠点を中国に移そうという企業がさらに増えてくると、自国の製造業が空洞化してしまうという懸念が強まってきます。
- ・ B R I C s の経済が発展し、生活水準が向上するにつれて、必要となる原料、燃料、食料が増加します。たとえば、中国はもともと資源が豊富で原油の純輸出国でした。しかし、原油生産力の拡大が中国内での需要の拡大に追いつかず、1996年以降は原油の純輸入国になっています。最近の原油価格上昇の大きな要因の一つとして、中国を中心とした世界的な原油需要の拡大が挙げられています。
- ・ 原料、燃料、農産物など一次産品の価格が上昇すると、日本のようにこれらの品目を輸入し消費している国から、それらを産出し輸出している国に所得が移転することに

なります。日本経済にとっては、輸入している原材料の価格が上昇すれば、企業収益が圧迫されるので、マイナス材料です。しかし、一方で原材料を輸出している国の経済が成長するので、これらの国に対する日本からの輸出が増加することになります

Q 4 . B R I C s が急速に成長すると日本の地位が脅かされるのではありませんか？

- ・ B R I C s が将来にわたっていつも順風満帆ということはありません。たとえば、ブラジルやロシアは一次産品価格が下落すると、輸出が伸びなくなってしまう。インドは貧富の差が大きく、ソフトウェア産業が成長してもインド全体の所得水準が一樣に高まっているわけではありません。中国は高い成長を続けており、少なくとも 2008 年の北京オリンピックまでは問題なく、その後も成長を続けるであろうと言われています。しかし、電力などエネルギーの不足や砂漠化など環境問題があり、地域間の経済格差も大きいようです。また、無尽蔵といわれた労働力を確保するのが難しくなっている職種や地域があるようです。
- ・ このように、今後 B R I C s の成長が阻害される要因もあるわけです。B R I C s には外国から投資資金が流入して株価も上昇してきましたが、期待先行で過熱感が高まっている可能性は否定できません。もっとも、長い目で見ると、B R I C s は高い成長を続けて世界経済における存在感を増してくることでしょう。このため、日本の存在が相対的に小さくなってしまいうのではという不安が出てくるのもうなずけるところです。
- ・ 一時期、「中国脅威論」という主張が盛んになされていました。安い労働力を使って中国から安価な輸入品が日本に入ってくるのは、中国からのデフレの輸出であり、日本で同じような製品を作っているメーカーの存続を危うくすると懸念されていました。しかし、そのうち、日本から中国への輸出が急速に拡大し、日本の経済成長にプラスに働いているという認識が強まり、「中国特需論」が出てきました。
- ・ B R I C s の成長は日本経済のさまざまな分野にプラスに働くこともあれば、マイナスに働くこともあるはずで。その意味で、脅威論も特需論も物事の一面しか捉えていません。日本の存在感を小さくしないためには、B R I C s に代表されるような新興国の成長を日本取り巻く環境の変化と捉えた上で、日本の強さはどこにあるのか、またどうやって競争力を高めていくべきか、常に考えて行動することが必要でしょう。

お問合せ先 調査部（東京）鈴木

E-mail : akihiko.suzuki@ufji.co.jp

本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。